



2021年6月館員おすすめの本

『ころべばいいのに』(ヨシタケシンスケ)

吉田 梨紗



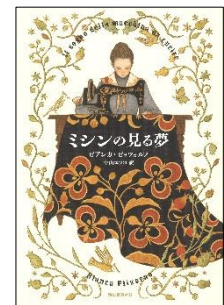
当館も何冊か所蔵しているヨシタケシンスケさんの絵本を紹介します。こちらの絵本は嫌いな人、苦手な人について描いています。苦手な人は子どもの頃も大人になってからもどこにでもいますよね。人を嫌いという感情を持つのがダメなのではなく、その気持ちを受け入れてどう消化するのかをユーモア交えて教えてくれます。

子ども目線で嫌いな気持ちを擬人化して、ポジティブな方向に発想の転換をさせてくれます。何をやってもダメなときはダメ、だけどそんなときもあるよねっと気持ちを肯定してくれます。この作家さんの絵本は人気で大人が読んでも共感ができて面白い本がたくさんありますので、ぜひ探して読んでみてください。(ブロンズ新社)

『ミシンの見る夢』(ビアンカ・ピッツオルノ)

原 真由美

19世紀末イタリア、疫病により両親を失った少女は、手に職をつけ自立できるように祖母から裁縫を教えられて育ちました。当時既製服などなく、貴重な布地で一点ものの洋服が誂えられていました。やがて少女は一人前のお針子となり、裕福な屋敷へ出入りしますが厳しい階級社会を目のあたりにします。けれどそこで出会った女性たち(パリからドレスを取り寄せる一家、生涯の親友となる令嬢、アメリカ人のジャーナリスト)が、やがて窮地に陥る少女を救ってくれるのです。図書館に通って知識を深めたり、天井桟敷でのオペラ鑑賞をささやかな楽しみとして生活する姿は慎ましやかです。また服飾に関する繊細で優美な描写も魅力です。舞踏会のドレス、花嫁衣装、美しいリボンや刺繍、おさがりの高級服を質素に作り直す工夫など、手仕事の楽しさも味わえます。(河出書房新社)



『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』(大前栗生)

大久保美玲



大学の「ぬいぐるみサークル」に集う七森と麦戸ちゃんは、互いに惹かれ合いながらも傷つけ合いたくないため、なかなか本心を打ち明けられません。特に七森は、自分が「男」というだけで女性に威圧感を与え、傷つけているのではないかと考えています。大人未満の時期に、恐怖をあおるような強い声が、世界の全てを表しているような錯覚に陥る感覚。その声は社会のごく一部にすぎないのですが、まだ大学生の彼らにはその見極めができません。2人は徐々にお互いの胸の内をさらけ出すことにより、価値観を共有し合い、固め合うことが心の安定につながることを覚えていきます。ふんわりした雰囲気をもとに表現されている、やさしさゆえに苦しむ人々の切実な想いが、じわじわとボディブローのように効いてきます。(河出書房新社)